士朗五七集 一

911.3
シ
1

朱樹叟士朗が俳諧七まきを
挙て枇杷園七部集初編と
題し書林東壁堂の上木させん
とせらるゝに叟が音信もたえし
いふつきをしへて名くるは今の
人がいつせの見えしらぬもゆかしと
松もとよりきらの後うし挙ひの

人〻の為にハ正風昔門を探らん
其枝折より見えん爲うち
またやふきつ路より始とをなして
此門へ折し初たる書様の志れ
原まよそ字不揃のたからよハ然ぬ

文政八未とし

尾陽夢光庵
志多斗

凡例

一 此書ハ去きハまふきく士朗叟文集に
載所
一 神祇名所なとをしるし部を立て歌仙
様まもなる少〻なけり類四時雑歌をつ次の格れ
句ホおふくなりてハ其の色し
一 叟れ吟詠千とまて其に入れとなく
落くるもあるハ杜撰より洩席又い座
にゆくあなうち小書にあ坊れさきはちな削

此編よりさいつる我閑隠ハ度毎ニ書とめて
後乃便へことなるへきか
他邦よりもおほせられし句共に撰まれしを
あつらへ梓にちりはめさせつゝハしかまへハ
無くてまつりけるをいはあり
流行変化も此道の常なれハ年序を
追ふ毎ニ風のさまも思ひの年月さしつかふるも
あるは委しくせす見る人察し給へ

士朗五七集目録

壱の巻
淌当懐紙
落梅花
麻うり
草枕集
於幸篇
松硯

弐の巻

法の華経
山吹集
名なし鳥
花橘集
橘日紀
鶯の眼
飛[illegible]鳥
松ほ炭
玉なし笋

三の巻

三日月集
玉笈集
庵大集
婦白庵日記
飛波嬋娟縁
閑古鳥
名なし草

四の巻

ニ笛集
俺夜集
宇良かしは
葉つゝら集
飲中八仙歌
長し[illegible]楽

五の巻

[illegible]わかし
き綵うさ
泣瓢集
蓑虫集
玉兎集
紫の戸集
文化五歌仙

当世懐紙

河豚喰ふて揺れハ謀の浮雲　士朗
峨とん尽ゝる写よ日あかるゝ月　桂五
山本のたよりしと出る風まえゝ　岳輅
土器作り筆の静かなる　他郎
寄かかるに猫まる花の古巣　五
家持（ヤカモチ）原家もるハ卵の花　朗
ところ〳〵のすゝのはとしてハ麓　郎
錯荷にすゝみて人あまり　輅
朝鮮の出てくらふ来る寺　朗

光琳の松みてくらす日よりり　五
秋の月何ぞりんすき夕の雲　洛
葉の二方まで梅のふ様吉　郎
西行の梅津堤よ萩打て　五
色々筆遠ほとおしさきさま成　朗
四の緒の路しとハ縫悟しん　郎
運もさきさまさハる　場光　洛
吉原の嚢しつけ出し盃のむ　朗
浄瑠璃に涙さゝ雨降止ム　五
子自慢ふたり舞する小袖哉　洛
家根屋の誕生の祝　郎

行吉へ舟ハ君やり姫かへりけ　五
芥子の畑中鳥人なる　朗
耳に名づけの緒ふ手のまきさ　郎
むかしの世の兵より出ぬる　洛
懲ありく針ぬ白衣の彩なる　朗
峯ふもとれり往移の雲くし　五
鶏鳴声の舟より宴けたち　洛
蜻蛉を捨ひよ洲らくと出し新　郎
主池の箱く人のとて奉し　五
佛のふしぎの業々ぞれの薙　朗
山寺子のまなびし負捨て兼て　郎

落の鷺出ぬ加減覚えゐる　松
春ふるも文字旦掘つ以加つり　朗
とそもあき溝と嵐ふく也　五
さし魚射る赤の目の毛ハ蒼そ　洛
海藻のうら緑柳見えけり　郎
也ふ山花時雨ニ屑拾ふられ　周毛
灰舟ハ荒れ潮つ生ニなる　五周
のろくしと梅の末置く筆取て　亜満
さのきちめそ江正月の月　白図

春の風弱の似ゐ向ふ寺より　羅城
京出るくハ伯文の大底　毛
おもかけ咲きの咲生ハ檀るぞ　周
杉暗落る浦ぐましの菊　満
思ひ合ふ赤ぬかゝる果と白捨て　図
あまりの礫むすの下さりる　城
尾越坂や簑こす風といふ系　毛
捩豆の生えて豆屋し峰　周
雛の月華りの瞼消えまする　満
桂板屋のこ井寺の秋　図
そうし酒買ふをいく埴織て　城

雛ねりは売りかゝるしみたり　毛
すけもあまし毛吹いきさ雪も降　紫水
古榎の木の子のとりはける　夏畦
かけろふの備へうつる蟾の声　図
琵琶うきあへに僧の悲病　満
ゆふし秋の暮を手出ても沖さし　周
村の花ふる四月霧せる　城
翌て杉禁殺なり嵐山　毛
おそはでおしはれ死場さしめん　水
像(スガタ)姿を現ぬりてうち縁め　畦
は溢言めおとのおあくはる　図

納曳する声をはなれて海向し　満
後はさく生て多花ぬり振る　周
乞食のむしろ徳る枯の月　城
足洗(タラヒ)の中へ落る鰯つまし　毛
雑深く門冊の吾の袖ねかし　水
識みふめと踊踏扮て来る　畦
年(ムコ)の身なり言ふきまるる　図
花をはけ出し咲くの鐘　満
海も山深くやうり寝てあまそ　周
新は扇の黄をもりし哉　城

雪晴や伊吹おろし来るゝの西　桂裏
菘すき鯨さげけ出にけり月　狙乃
よりけの鉢に隣家の窓を塞て　士朗
桐の若木の茂つて肥より　古戎
雑用小袖とる鳴る西の山　乃
小家のそけ八錯場を汲　棗
あとらう八善杉の後の法出すて　戎
傾城おもかるの字かる藪　朗
明星や世八寂めさき名高き　棗
多書そうく淋まりく浦なり　乃

恵心寺の男ま人ま酒の気八　朗
向への堂悦犬か吼つゞき　戎
其明八黄金の鐘の白木槿　乃
何か陰くもされなきの秋　棗
天狗の雪居まうく浅月の糞　戎
星汲わかりけし太刀の番汲る　朗
花々聞き舟うてふくか花墨　棗
小船の堤水石まりしアすし　乃

白芥子のあらつまき方や竹の葉　狙乃
二三日もわの山さくら小川の面　石岱
古いや竹の子くたれる夕かくら　五周
蜻斗や赤のひ男の主の鞋　岡毛
そう色罷にかすむ麦のあはれは雨のせ　曉臺
扉しまる窓の楷の枯垣草　桂五
伊勢の海見えしく宿手丸く
おかし(?)ひる船の梶こえ子やませられ
魚ひろひ酒飲つれ流しを
追まくらし

りんして浪に追るゝ涼み舟　羅城
神火燃えあれ狗春の雲の广　菜水
茄子蔓して雲霧の四陽哉　幻住菴 卧夫
侍たちは都ちつけ師走月夜竹　岳路
魚釣りに瀬行けり林の面　亜満
水鳥も行もさそふ日和風　葩香
山茂のあし懸けり浮藻草　岱青
涼み舟やねむる古萩　亡人 桃明
トくらもちつて蘆わり亀の甲　少如
霰出わりや眉毛はかゝる雪の影　平窓
翠濃や竹の月影を練りき　桂裏

橘の日られ咲ぬまゝり閑城哉　万盛
書の蛉の夕川氷よ見え来る　吉戎
竹の子のゑかゝれ大き境かな　布雪
秋深き風鳴りさめつ指原　魯衛
木からしに梅の小枝の宿らぬ　一之
炭薪主人二點を書す云ハ
独よしく東武ま冬し
一ハ爰の望上示のけ高屋を
ちらしむかしや主人海ら来て
芦よ何ふよ虚點を告よに
我ハ鶏の声ひくかなしかく點　士朗

冬枯の日ハうしろ川嵐山　也郎
雪の日や小鳥のくる小松原　元凱
新焼よさきと御城の暁かな　夏畦
冬の梅ふるひ出たり伊勢路の
町しまきひしハ家十年の苔
かりかり柳そのえの嶌ハさよ
木からしハ小蘭のうれ寺　白図
花菜子海ふ一乃松のかな　呂盛
新米や日うし我家の薫かな　竜二
うす苔子か餅さくら出た棚井かな　都積
山川をつらしとの小夜捨て寺　松人

秋雨の降出てやゝ寒さ寒し　網女
明月やうきくもふ水のそら　宗雄庵
桜の中子紅梅ゝある盛哉　松島 文芝坊
長ろしと蓮の浮すつ生海鼠哉　東壺
作ありよ立乞りてりこそさくね　亜満
耳くきにおのまふ物ふ老照　白図
蟲の声聲よ港葉の一おろし　豹門
嵐山の梢々よりタくれ　京 百池
鶯ふ雨ありて晴日の曲かく　士朗
川風の涼すりありか小夜枕　闇毛
両霞林しるゝかすり宮家辞嫂　五周

白魚の骨身を透しかゝりけり　暁臺

于蘭盆會

あら海へ舟に出れたり魂よふひ　越 賦原
秋の暮親子半葬ふくるひ祀　桂五
大井川今は出てぬ暮ぬうし　羅城
啼ぬ蝶のなきうつ夜の夕哉　岳輅
山梔子の花捨ひつゝ小原さし　他郎
来さらや大石房の石燈籠　白図

萬田蒼よりも暁師の母尼公
ましく家刀自の信養なと
孫をもちたり此刀自猪
孫より曾孫えしるハ尼公使に
わハ酒とハいへとも宮餘にすゝめハ
あやハいさゝかにほそけにてよもふハ
陸奥の壽にもあひをとつけハ
越後の霜筆の身にかはし
夢ぐりなすかひす家の師の
猿をいふりおもひかなすから
はありにいとをしくし萬一

刀自のちかまハ家書をとりあひ
酒のみさし背笠にとち中の
浅き物語もおきく田るかれ
尼公もさしめてみそよけに
ええのかひなるさてハ例の
あをし一つの事によつてそ
なすし常の懐紳とをすれ
名付ゐるよしをさヽ家に
家にあるしぬ

鳥亜満

天明壬寅十一月

落梅花序

暮雨巷乃大人むかしに白河郷の雲をと
ひて旅のそらの錦をもいつしか逢坂の
関守人もしれる志ありけりの由きかせよ
たれありし名残されハ去年の冬ハ
五周をも倶して若狭の国よりめぐり
出て又予か家に落葉拾へハ来たひた
る庵にて何をよすかる人ことにやて尓
なりて白山通三条の小まひとつの
案内もせまうけて師の杖をとゝめれは
かつ予も咽喉を痛る患あれハおもふる

志つゝ小僧等にをとを加へさせ参らせんと
なり路ゝ本なりしが是ハ跡つと扁額して
下居の方へを催まて日ハ十月廿七日なりけり
志ゝおりしよやき門まふ日くにしけり
凪汝く歌くにかゝはすきハ五関も今ハ
心易しと暁をも見ゝ國に帰りし思
はゝらし時ゐもをき霜なる身の十日
ほとりもりてりに頃のいさる日ほに
信しく食道をれふさらりけりハ
物を通すへき術をもしむるに和尚の
志るしもみゝにおゝしき廿二日とハ舟日

咽を鏡食はあさといふハ虚ハ彼老和尚の
奶杖なりし家ひさしく病に臥し
寺に来たゝ海あさふしつゝ苦痛する
事十餘日嘗とゝなくうつゝとなく
今ハ薦の細谷の御きかきり命に
かゝらのとてハなつゝに和泉 持
聞へ参らせ
是非縁あらき世の道ハ絶くるに
と昔しき中に字へいそ其をもりゐる
未しい彼鼻うちかしつゝへ参れ 考き
かきりなすをいハまりひとりに宅張の

人々はいひあへるに廿九日卯央のころより
ますゝ始よりれ事ともかはりゆきし
ふたゝひ良醫をまねきしかとも療養
ちからをつくすといへとも甚しく粒をすゝき朝と
わけ夕とよわりて見ゆるく沙汰のさまに
うせりぬさては小林良沖ハ家三世乃
業をつきしことはゝ此門に極ふ乃統系ハ
他に越て肝膽をくだき紅方術をつくす
も誠心や通じけん病いはしらず居たるとし
みしかし術をも進むるはいかる事ーも
なきしやうなりしハ人も家も始てらん

隠居たるやうなりしと猶もものゝしくしる
心ふかくにむかひて佛神の擁護をたのむ
七日の朝雪の降る折にいよりもかゝれや
ありさまに降ひとまくられんもつれ
心にあまる趣くてゝちゝまでもつかりや
いとまりにふしぬるも如何とぞ吟し
出後の家に
君のいまそかりけるを思ひし嶺の松　芦涯
新堂の脇を昨日かいありけるを人々も
心ひとつの句をはしさゐみて一巻の歌仙を
なりたる

おりから尾張の国よりも候して
雪丈寅を携へ机上ふちきらる 士朗
此句を折り梼の始としてなかし茂楽を
拙てたる一巻のあいろを送る山川
年筆を隔なりしも同峯の誠心符合
して折りかへにさへ時うふ了る神の
ようはよろこふと見えてさるは北野の
聖廟よおさめし快復を祈りしまゐ
此日病癒洪節して書ハなりしてす
再生の春を唱んたまふもこゝろ
やすくられ年をあり此頃をいとう年かりし

根ひあへてありなか此事ありしのおちに
告ましと此夾ハ高を衰へていよ〳〵
勢んり十日たち薩ニ六の完命ら終より消息
なりと宗匠のいまそりしゆへとなりしそ
紳参き守部ハ霜の三百韻　完而
更園の門人同朋句を添へねて送り
来りに自ら催しまうり其使のおほかるぬ
事あるを感しくてもとて悦へる
詠うるハしけなりとより気力なく
かゝいうへ此さハ良扶持の眉を
ひらきりあるも嵐月一種の常しきと

たゞちにかいつけあたへて病中の筆にはなく
白河殿のみ沙汰あるべからぬほどの戯も
見えずふかく門人の措を勤しめ
宗匠もそゞろ感じてもありけり
なる事にぞありし一日
二条家より御使節のにはかに病床
をとりくおつき給ひとをおしこまり
なり道の栄ある文をおくりたまり
給へハ年も若く明れハ青陽の光
さしひかりて一天中もとゞまるつひ
給ふよろづの朝家より大人識者なんどして

手水うかひなどしてつゝしみ芦渡に
毛氈なる文臺の表書をいのりて
硯墨毛やかになみよしつく
ひと瓶をしたゝれ人すなはち筆の管始し
たまふ百池筆をとる
この青湖ハひとときハことかはりて
流る色も民の芝なくちとせなる者の
あやおる祝ひにつゝあるハさかえしく
手まきくしはしも八一回中もけき
松を花がへくその
皇朝しそもとくしなき

玉簾にきこえしはらん芦数らんと
十二日例の評りして参集りしもろ〻枕を
ゆけり
梅秋に枝のほころぶや蘭の露
かく発句を案しけるもの〻の深切
なる介抱に寄て日あら〻に全快すへし
はら〻小庭の末まて秋に行く涼しさを
よろしく清風の俳諧をよひもて呼ふ
あはれたもまうこの夕もさはりなかりし
さて廿九日に東山南無菴の
文臺をもちゐて見れは加へさして出かけり

たち出るとする事を今日も帰京経と
枕もとに淋しげに師翁を帰し見
うちよりて出ぬる秋の雨の寝にや
はるかむ家への戸をたゝきまたく
飛出く見るに蕉門の僕の京都なり
大人の病危篤なりといひもてくり
あるまゝふさに見きに驚れハ蜻著を
むかしめ良沖芦涯湖美其成等も手を
すゝきてこく枕もとに在りとぬかれ
さはいかにと師の耳もとへよりく高
枇杷園りたかりし高喜に告れハ

蒼く唇うち紫ふくろまたる両眼より
涙はらはらと落るをみるも絶し世に
名残をしく知画のゆかしけれとも
遂に体のさまもはるかさも悲し
さもいろんうしろなく たゝくのむね子勝を
やぶる割ハあまりの天あまりゆかしきハ面影
相府ようたく相ふかいさへやりちかうき
皆菩提いつしか殯斂かくのひやきは
きはゆきのたしめの四日京極四条錦
南大雲精舎に葬送の式を執り行ひ
其の追福かれもこれもおこなひき

うきりを禄もすゝむはいとおもき法目を
かけて見を備へ今ハむりしみゆかしきを
つくゝ子業戴不朽の根を空に事には
成ぬ嗚呼吾翁の後継ゆかりて
其財銭を寄して たん人を同しうす
措むへしからずして家業を継ぬる事
能ハずハおそらくしく座右の湯茶に
給りしも終ハ未丈もりそれに終ふへかれと
かゝる業とも志ぬるひの鏡紫の同志
ゆかぬとものたくの門下の人々しから
追慕悦我の彼にかはらし師の鏡馬の大概を

すこしもせまくかいけ

寛政四年三月

門人 紡わり盥

曲江亭桃睡涇盥書

追悼

俳諧之百韻

新わらいもせとし八世草し勝月　桃睡

たちあるりまのり岩の雪解　百池

小貝ふむ妻の洲浅まに涵とめて　蘭更

恵まむ掛張るを引むきそひぬる　嵐月

長くし鞭なる地をうち出し　湖美

やるかし火となる氣象すしき　一峯

ふもとより松原はく西手町　芦涯

まる世夢己のくかりや寿家へし　其成

鳥の毛をむしると風の吹ちし　佳棠
明日の空を黄ふ鶉来　朱玄
新宿ハ新酒船のとしらる　葛巾
米をあふる家のたそかれ也　慈周
山ハ山の声の鶯鳴渡り　五雲
木の芽の鐘撞兀とゆふされ　雷夫
篠深に流れ法味万中なり　如瑟
新盛ひらきて汲財をまつ　子直
日和から月の光りを播りけり　紫暁
京をそれ出てきくぬなかの里　東湖
おもしろやひとりしる関をなし　月峯

手にむ仏のやすしなりハあらき　蓬洲
花ちりて橋の袂の春暮ぬ　不木
直宿なりの心ろちとけまし　士卯
大几巾のまかりて眠り覚けり　不朽
雨やむさゝ墨の家並　五周

右一順下畧

追悼

前書を略く

おもふさむ作たそり森の梅　嵐月
かくなふりやせなむ春の色　湖美

身に添ふる影も七尺の勝月　朱玄

帰るさノ枕やまして求めるともなし　一峯

あけひばり紫雲に濡つ声ゐ　其成

霞の末もきのふとなる旦かな　百池

初七日

去年の春より師が病中に

山のめぐりとめられ見のうきて

氷裾織乃仙錢を木へ作り

しかれふ八をかなすき閼伽水

をなするとて

氷とけて水汲みなるうきよかな　桃睡

瓶にかなしき古枝の梅　嵐月

鳴鳥のいつまで我や誰もなん　湖美

此居眠りつ紀墓の一附　芦涯

はあらり月乃名ぶあかやはし　朱玄

家ごとに添の雛まつりけり　其成

右一順下略以下効之

二七日

梅さかえもられ素汲菜のよに　芦涯

とかくまさる物もかなすき春　桃睡

ほろ〳〵と杢きく日影も暮かゝり　嵐月
月あかりこの淋をつゝくし　湖羨
梅の風経むとあるこの下　一峯
砂ならける草のしら露　其成

三七日

凄露とこちきはらきるに似秋か　百池
御法燈のりけむりよ月　湖羨
大数乃くより書の色見えて　桃睡
巻帆うし帆に船ハ出てけり　芦涯
巣の雛の葉をえらりに伸より　嵐月
日のあかるけいらかしかくし　朱玄

四七日

惜しさもひ法く罷七日の春の夕　嵐月
御さゝをやらつ朧　もし　一峯
たすり氷小浪もまに打寄て　湖羨
百間きらり懐ひきもへ　桃睡
みしる秋の月照らるゝの影　芦涯
寂しなく窓のしらき　百池

五七日

皓るえんるも花なりて梅庭　湖羨
ころつくに消ゝしかる　芦涯
杯おもしまるとりきはらきかな　嵐月

南うけなる家に侘りあり　一峯
芙蓉はくかくより月の出より　玄成
むつ露草をおちらしみる　桃睡

六七日　前書略　北越 白眉

はすの雲なすに萩よ露もなし
さつとさたへに基きなるそゝ　羅城
け須居蛙鳴て望むらん　桃睡
風そよいとさつかどもし火　青阿
旅こゝろ馬まりいと夜お眠り　一峯
一里一壘の海のほとり碑　幽明
美人の本まぬ風雅よ月株　玄兎

ともへりて草まもとさもあるつ虫　其成

七々日　詞書略　蘆州 完而

梅ちりもしくやしき旅の月日かな
香木のこゝろまゝ西の峯　桃睡
うちなすれ鍋鞁よ春く繋ぎ　青阿
裏手の端の櫓ハひけさより　立蘇
西風の麓よこ渡まよ通し　規風
乾鮭よ百ちする夕月　士卯
先追のさ紀ハ旅の露拂ひ　芦涯
うき世紛れしさく秋ハ来よける　其成

追悼その外詞書略

ちらすなや辞世に添ふ香の菊　紫暁
香ちりて白ひたりや墳の花　桃之
なかれけりしくいくたく香の形　佳棠
絶けむ影も匂ふ梅の風　如瑟
淋しさも末月を松かる月　定雅
散梅の花嗅む人との思ひかな　車蓋
梅ちるやしなきあとの香の夢　月峯
春の夜を鐘しく花八散るなり　宇治 鱗路
須かたや傍の寂しき汐昇り　田原 毛條

先われきぬや菊の香の夜　青阿
香の風梨子似たるわしたれ　士卯
回向せし夢も白つよ法の花　日枝 晋鷲
惜む花のほとふるつ月ならり　不朽
ちりや縁百日の夏きさし　白 黛
寂しくて冬ひきろき新樹陰　駒丹
花辞して名残ふ香る雲かし　雷夫
喚続よ日暮なきひやきとぎす　眉山
時鳥や蓮催才水一堂　城南 下方

鳴入て古巣そるゝ也りわとまにに　貞松

花よ雪わふきふかなむなひか、　文昭

家よしの実やとりし花のあれ　(大和)可翠

笠きちやつゝぬ道よ誰か為、　兼来

曲江亭の出題よ師の梅形を

波つ雅なる梅様取あへずも文様

返るかや泛る

春かつ色見えくのうつと開きつゝ　蘭芝

志のひなく雅る世そちる桜　右稲

梅ちりて庭の匂ひもけふのこと　(若州)陶河

うくひすも今ハそしまきと古巣竜　百馬

花陰く春の名そうせるやる　左橘

世の流ゝ年解く氷ハどよの水　臣川

此春や雲雀なく日の怨めき　兜雀

なすつしの咲くハさくるよ咲梅を　(丹波)武陵

名を深も罕九日の物橘　一巣

ちらぬわくの桜ハ形をて春流　翠實

志けらくハ陰るゝ春の名残れ　暮蔘

敵たのむみどり消く春を泣　(高サゴ)布舟

東風ふくも今うハ根なしの思ひ草　貝武

花ちるやしらむかしき日和かな　北越 桃路

なき魂の梅に曇ある春の月　松雨

新芽はし水く溜れ春の水　麻栖

この翁流を学ぶはたよりは　米魚

春も向百花胡蝶に得ぬし　宮川 騏上

諧書略

花もやすらし定なき世のならしふ　攝州 玉屑

高信を今さらしての哀れかな　如鏡

実は粋緑ゑに色き涅槃かふ　花樵

中々にまめくかれしき初使　梅舎

晴のうつるさくさよ春の霜　五嶺

併やいかに是にちらきしら梅柳　洗州

春も其の併寒し峯の松　梧菴

つもれどもきるるむもしく春の雪　五粟

つまさなくも梅のそそ白ふ葉の露　五艸

けふ庭の花のとばるや春の草　脱貝

あく石なき水も解てそとの水　濃州 柏由

ふりも寒く梅に清らる雪の人　石蘭

ふみこて切梅よりけなき白ひふ　良安

よ京の宴にゑんとりわろしく　可能
なきもたもきいさつきにふして
手すりふる月とも出る[?]に給　是八
ともかくもたゞしなえむ春の月　玄兎

四月廿九日
百箇日　於大雲精舎興行
俳諧之百韻　廣明

新志ふふ志るゝの松に宴ひらし　桃睡
その月うつる露絲の夜半
蜻的の射わけの一手まけむん　不木

いふことききよき人かりあり　百池
此里はみれ山水に住なれし　芦涯
さうしの名跡の夕ゆくれふる　湖美
わくもなく出りたる白き面影　嵐月
烏帽子を笑ふてかたりたる　佳棠
わきさをきつ十寸種の芭蕉植て　白眉
句ひすしきむしさめのあと　一峯
ところくと大仏殿の人のいる　眉山
一日くに走る世の中　幽明
船頼ひある夜の程ひたつかしく　白黛
百里わすれも噂くりかへ　雷夫

砂からし川原も寒の流かな　定雅
ぬき出のそれは勝くもとりし　東湖
添らけし仲倉よの大かひ　月峯
まちろそかぬきむ旅のつましく　朱玄
何神の宮も雪も落も菩果て　驢丹
つくちのすしも雪のむらきへ　笠斎
咲ぬるの花の香を擔ひつま　蘭更
今谷園れそ渇ハ来てみよき　古塘
渺くと水まろして山高く　春草
る市なそしわとの芋畑　其成
門よりも寒日請を觸そり　蓬洲

来てれしつくは踊る星哉　士卯
臘八はむしゝも蓑ハさめぬ之　青阿
よろしくと男余ふむ　不朽
志のひ路の袖は蓉のうちかり　羅城
あすそてハとけたり紫陽花のいな　少如

右一頁下略

我友龍門のわるし時を得さくハ雲にまは金鱗をかゝやかし海中に澄くらし蜥蜴とひとしく性を害ふ法きハ无能の蟻もわらさ子ひのかはいりかしてりもとれわらりいさめ事歳をとかさき霊丹志るし

なか〳〵暮れ雲のむら消きえとも　に
世をかたき結る八惜むへきみなかけゝ
しきなりしかきりあるすらひ終に
暮とられ暮もなくて百ヶ日の忌に
あたりつゝ大雲精舎の簷端の風
ふきかはりゆるき庵前のはかに
たもひあたらしく

うつりゆくりや　ことはらに　　蘭更
萩子のこと

わか師暮雨巷の阿叟安永のはしめ
此津に逍遥して石山の居れ長閑なるを
わすれ三井の秋風に旅寐のゆめをと
覚し金鼓耳をぬらぬき玉藻
魂をとゝめや此人呑須に閑て師しく
錦むかれをもふ叟なりして年に一晌
をわらふ蟻蟻として浮る事なるに
似たりされとも年月洋漾の郷にを
免されその古幻住菴に社を結ひ
扉をかりうけて傍に斧斤を乞ふ
叟もてこゝや来りて蕉翁の結構に

かゝけ董の高吟塚の序の一巻を綴りて
志ゑんはされのし秋く風雅の妙にあふ
叟ありし東武奥羽に心をつくし門人
阿央に屬し志しこ序にして天明
水兎乃二月毎ひ来りて義仲寺に
法席をもうけ三井何某乃傍正を
請し法義幟法を継し且幻住庵に
俳諧を唱て
蕉翁百回乃遠忌を引上雑れしも
命数のかきりをしられぬらんや正月
廿日桃睡花翅の書をあらへていふ

此暁阿叟美容大義は甚あに生し
孫ふ也といはへ識しやらにも行らしれ
性格として洋井に楫しをとらもき
関東に所を然ふとらみに友ら紀を
うらひ統門にのゆめは此方ハ継の
亡跡を指しく傍に蹟跪寸拝しも
あへきこととましぬハ末ひ無傷を
いさゝん今ゝありもありの名を急し
朋にむかひき巣家に向ふことり師弟
盟約の始より此別何ん事ハ洒ら
ありとしへしも泣淚にて泝し

筆の命毛も終すれとなりて慟哭しくて
まつなかりは終りけり
しひたる歯の根もわかれに泪　騏道

正月廿六日於幻住菴興行

追悼之俳諧

去の春の暮しも常に一七日　騏道
あつきなさゝの袖まかりけるふ　漁更
帰子鳥ものよ准へて忘めすらん　于當
涼風にはる舟の中みち　綛凡
南と北もとひの秋は坊かる月　蘭芦

きゑたい人の杖ありなり　慈周
葉合矢組かにはの花ゆるき　五英
みをとぬふりするか背の梅　百葥
やうく判みとりの髪を擬り　二薑
まうしきゝぬ沉のふまとあり　馬涯
鳴神のあとは日の出て蝸の中　艸斧
わりふけ罷りなすに桂未否　呉罪
骨接ゝとも肴けかる接とは　藜化
祭れられたる笊穀のはてし場　糸二
いとつゝき月八勝のあはめしそ　吾兮
松立撞ゆめの鐘のとかなり　三藜

もの売りの声しる君の国慕ひ　故常

今ハむかしと書りし当る　蔦巾

手ふとれハ松の光りや志明語　鯉一

我あらしうる中庵の升　桐吾

ほとゝぎすに不立文字と書つれハ　元隣

象牙箸ハ歎外別傷　烏孝

名み金銀を常と知るへたり　二董

新浮ふりのうちしらひけり　馬涯

喰ちぎる枝梯深き夕されや　芋介

大内にふる紙灯ともし火　呉罪

立山の響もふけて雨の勝　藜化

侍従へたまふ夜の垢付　禾二

亜れハ風招ときく萱の月　藜三

ふねま日を経る芸人の秋　故常

霧みちて留の影のまくら深り　蕪周

巽の角へうつせてまうりん　桐吾

領白の齢えんこむ布たらぬ　鯉一

ふもしめ垂に醯の壷　薫藍

浩るにくも花ま限りの日をつぎ　蔦巾

花のくれぬまし霧の果学　紋風

善哉巻近き世を辞　ふと笑て

ちれとも香ハ今に床しき梅の花　五英

悼

三保のひさひに寐しされ梅　葛巾

悔きのあるにもとのゆかり香より　艸斧

うくひすの声なつき日あるわさぶ　呉罪

古くはやうてとの葉ハみとりなす　馬涯

春風に哭さ其の名なつ日香りなり　樂二

花ハ法をぬ蹟のかすき此夕　桐五

はめさはの音に入ま也や塚の霜　于當

月へと夢世の旅の枕かなぶ　百崩

つく鐘せ霜やいかにむ俳の庭　素考

枕もとに手しきりに花のかすき哉　蘇律

其の問むしろをしと勝の水の月　漁吏

月に墓ひたがに忌る様も道　棠蕙

孫に落る樹も濡し水のよし　鯉一

春まくやむそる根の梅や今はるよ　巻関

春なて四方に鐘して散や梅の花　烏孝

むくさきの墓の根と市ゑさされ芋　峴風

名のこ咲及ひし晴蓑かな

追弔

ちりて程ぬ花の兵そ香つらき　二薑

一代の風流ハ栽の空の露とともに消て

暮雨巷のやさしき名をのこし給ひしかむかし
閨にはへ胸はれて其比の交りひろく
名ひ出る舟を悲しきや中にも二とせの
昔の秋を終れは 幕下に白髭の来りて
峯をは泣きみやしろに香をひたすり
左ききりに神をつくし拝し 道清
おりてを都をへき 鉄の眉いまも殊勝に
むかふごとく我家は夜の夢しとては
湖の拂月に別を惜しむる夜さらの
家に集会を催しも主家は誰か甚に
か句ふに発句は誰か枕をとる黙して

ら世には阿うしられうしの胡旨の
悲を都にりらるみ家人申す人
のうきのもあはれ家をや見るに営の
ゝゑもうすてしき身おりは梅のひらうも
家しきもの〻は柳乃ゝそものとなき
趣ゝは雅への小松も気ゝしたくさ物ゝは
み路をの言をのいひつきもむも中し
やも早は難波のわしの名をねる病に
さへおりされてわもひとれ多留のし
増の末も想ふつゝ言き心迷ひ か
能もせん拝もせぬ旅の宿のとも

人々の歌をとりあつめつゝ摺臈をなさつと
いつもかさしはらふはれし
まつはなしかけ給ひもちらむ
古烏帽子

月居

一日の談は又よむの十年に勝まさり
とは印月の時の事底にとくまきあり
是ぞまん称心の主人去来名のはめ
つらし常の筆者の葎にト居あり
書の文をしまり好みの宗匠
すまひは朝夕とふらひ家の跡し

師父のことく親しく侍りし年頃は
筆硯の座ほくに参りて教をは
北筆世を去りぬされは余の常は
遙なる三渺学の書をそらり其の
光をてらく三井兜田の秋成律らんと
風雅の交りもしめぬらそろへも
くつをまて七日くの法しめ塚の
世の業いと年くる俳諧の様く親密なる
書ともあつめ集めつ其江寄の
心ふかくり給ふをよく一冊となし
其義と共に其魂を慰んとするこそ

ありけり

洛下　其角墓

芦汀　記

二月廿日

初月忌於古渡洞仙寺

法會修行

子規を死出の山路の鳥と人を呼とても
なくふり出て鳴とよみ人の心の
鶯ヶ谷のむすめもおやしきも給ふべし
にいたれ鳥のなしきそのひて鶯も
まさ聞え給わりや猶さを驚ぬ
叟うせたまひぬあまたありきやかゝる絵よ
いふべしといふもそもむく世をそむく人のこと

多くハ海山のおもしろき中に　昔をなつかしミを
楽しミ侍るや此所を　此津の人の志を其峯の
頂のうちよりこたへて孫の名とハし侍りけり
これ其もしをなりみるに蕉翁の本意
粟津の浄土は行くすゑひさしく文字去来の
流れ其薫りをも俳莚に園遠し
たまふしめあかれけるしけみくも侍りし
なりあはれたるくしくそえたへりける

二月廿日

俳諧之百韻

散うめハこふつ墨染の匂ひ哉　士朗
苔のむしろの春そそときき　卧央
峯の雲里ある方に雉子鳴て　白圖
ちらさき障子など表に出るも　駿六
只しきんの袱来をお縁あ　方岱
いつしかなし秋の中比　彪門
露の為に明月は降かかり　紀鳳
たくさん門もうらこく鳥の巣　五周
盛りし物書なくる松の木に　晁明

こゝろざし送る伝来乃窓　少汝
あきハ戸にも書の記こへの香哀　沙漠
わしもとまでも一八の花　羅城
水鶏なく軒の枢ひなゆるし　素兒
神泉苑のさくらに西雲　素外
物名の絵のくらし法師とも　李谷
さびしさに影も見合せたなり　徐英
ぬき出て絵に根の窓の日のさかり　閭毛
網もなく丁も財をしる小　岱青
笈笠を持るゝ字まるい江戸杖　圃暁
人ふも一日みとゞぬ　印　判　沂凬

花山寺に山門ハ人許されす　岳駱
しら浪ちらく遠風の吹　怡泉
まそらくと雪雲に入雲に入　昊井
絵なし事々しく又ハ麻糊よ　南陽
鳴ひし絵のかわりを当てやらで　臣川
いつまでも花まかりむらく絵　寸長
桿の笥岡の名所の景の数り　雨曉
今ハたまくたゞらし南胡　几鳥
鉄の双にこまつし物ハ何やらむ　閑里
花とうとまりに菜の花の散　扇里
旅にて立にも何ゑハ有色の心　桃子

はらはらと出て啼るを仏なさき　物哉
聲ある鳥追ふ舎り川向ひ　烏雪
木槿に結る大樹ある乃岸　亜満
名をとしのぶ東武士の袂の露　叢水
をどりのふりのなつかしみよ　也梁
快き秋を吹出し袖ひらし　看古
淋しけらく匂ふ稲の香　挂丘
恥しくきげんめでたき物語　哲令
帯刀との癖ありしす　星阜
鐘戸の明すて隠く夕月夜　大年
傑うきを赤く山かゝきん　一風

家もかくまれくほこなる身の縁や　茂竜
真冬あくる夜の小ゝし八ちもしほ　沖之
浮舟の月喫物うきの中　大阜
今朝の俤をとしのほりゆく　狂二
紅ろ薄やなくもりまりに浮ひ出　發兎
然れし出し橋つくるせ　満子
面白き伐を倶つく庭の花　帯梅
四月しの声を啼く形文れ　魯雄
恵くれぬ何としてか八思ひ合　庭甫
忠は思ひく筆を拾ひきり　五寅
とやくと小窓から紙菖蒲草に　稲城

若楼小舗の塩出しをするる　逸少
しら雲のかゝる日ハ枌雲蒼く　雨滴
田鶴なきけさはあゆまる也　士朗
送りけり菫は阿闍梨を見送　臥央
身にふれる雨はしのゝめ方すき　白圖
花咲しのちかうく落し風の音　彪門
ふるさの厩の草を擲出し　万岱
山寺は扉といふはなかりけり　蕃渉
脚氣にてさばる乞食の僧　昆明
いろ〳〵の注釈に世は月と雪　少如
古名所とちとらり呼り　素兄

松風の上に稚平も近されハ　莚城
襟のよごれを濯く折く　李谷
只人となりても楽郷もとら　素外
嘯おそき栗乃木の下　閭毛
枯の葉ハかりくにほのかさて　徐英
ますゞ仏菓を喉に気りし　圃暁
葉の水流らくと流るゝ　岱青
昭いつ乃月のうれしてなし　岳輅
涼しなくて車破れし虫の声　南陽
塘にすゝふ祈の音低　雨暁
翁そとての気ハ西津節ぞ　寸長

名のよき児ゟぬける柳をとこて来る　闇里
わりなき紙ゆゑ咲出し西東　九鳥
ふたつの蝶の舞つれてきて　扇里
ふるさとの名わすれて成果て　也梁
春の雨を書く傘をさしける　鳥雪
むさくるしく薄に繫たる舟の蜩　斗之
鳥羽ハ涼しき流なりけり　茂竜
昼根落し書ハ嬉しき来る　古常
針の音する所につきを出し　大阜
好きし紀筆色ぞある　松梅　魯雄
風は流る源氏への池　叢兜

まくふりと咲き小萩をふりけり　稲城
何さらひらひらふる来る　帯梅
白椿乃門の内まで這のひし　逸少
高根の秋にかく歎る節　五寅
稲荷方の流に出する言の月　雨滴
今をはかり出来を刈し　庭甫
金襴也枝草へ与ふ毫を書聖　士朗
紫楽々ふり此木の戸まみ也　沂凡
歎冬乃枝ハ淋しき雨　蛙　大阜
だれしいふる岩の下　葉　彪門
此あふり経ふるしたる人ハ雛　素外

何またとへむ風のかけろふ　少如

花鳥乃声も昔ハ夢間景て　羅城

有髪ゆふ柳あとかなり　岱青

去年乃沙弥意趣にすゝふのおりて師の病
床にかしつき居たりしか病の所
ある日芭蕉の翁乃像を取出て書画に占
所やゝ示し給ひて後きこえんなるハ
吾たち弟子にむかひ語ひ給ふ沙玉に
隠れとろ寒ひなる帰りて後の世を
時たよりをかす猶に書き川

師の始の翁ハ芭蕉乃翁にまみえ
かしこくてかのよくしまししとて
いひあへりしつまでも人も悦ひ
ほへる中に去る師の廿二日師の
命下り遂を書おくり恵み返し大かる
悲しさに涕ましく胸せまりて
思ひ出の時も昔の事にふれ

淡雪のあはれやとふきちる挙け　臥央

拈香

三廿日蝶鳥さへも静也　万似

打かふ鐘の聲ゝ昔の姿かな　羅城

鳴鳥の聲の御法の花むしろ　閑毛

春の日もかくまかり玉ひしか　岱青

其世をいへる緋白小山桜　岳輅

涅槃会にあふさうてへたるごとし　少如

蝶鳥もかくて此日ふゝ念仏か　五周

なき跡の名ハ雅高し楊ひかり　鳥雪

撞りけく今ハ淋しき打ともぬ　松人

春哉願ひのこし廿日月　沙漠

此みちのゆけふ立て骨の露　魯雄

いさゝ家ゝ文字ゞ並ぬ春の花　徐弟

面むゆゝ世は陽ぐり春の雪　満子

なきたまへ後世の光なき春の月　逸少

山咲ハ若に家[illegible]ぬ梅のや　茂竜

春の梅ふかひなき[illegible]の昔か　稲城

陽炎や[illegible]なき人のもの　昆明

梅の香や涓濯妙わされぬ[illegible]　計之

折ふしのこ年ハ丁度ゆるみかかりか　吉甫

師の稿中　うき世の名の

此を唱ふるにも猶ふかりけし

たえ〳〵まゐえ〳〵まてそ花ちらし　棲谷

霞く浮世のみちの奥ふかし　大年

角落て鹿も哀なり秋の風　呉井

魚ハ雲の下まて出のあらしかな　九鳥

降ものゝ手ゝ満し花一寸　素分

これや此椿るも生ふるも手向草　雨曉

ありもなく語ふも清し水の秋　桃平

咲そりしかふ蜻蛉の葉ちりかゝる　碩里

夜も去年もさ遂早苗植へらるゝ　閑里

それの木の杖くすへおきし冬かな　沂風

あれハ春さうしとさかすまよひ出　寸長

霞くもる山もたえなふかうなふさぶ　南陽

清の名書もむかしきんかれ　巨川

ちるの露すゝて解て秋霞し　雨滴

猶かゝ来の身まてむ沼よ出日月　五寅

雪ふ降てた古き秋に止まなを　古常

目出度さハ拙きもたり雛子の聲　閑虎

入月のかけよりもれく啼雉　青峰

花もうめの露も涓の杖もひふ　駛千

大清の月入るゝは分の塞渉かな　嵐桂

霞とくへる待かれし岩の上　李谷

来けひし俳諧まてハ郭公　宇昇

世に春をし大木枯しと夕目から　秋麿

うかんだて捕へぬ甚をなゐか　桑乙

唱しうれしく師と敵と争ふの
むつびや雑と給と師の室ふと名も
嫁ならひ系のいふつと師もましし
うきつ其こハ人々のよく恵まる
師おり筆より移ひて中耳にきく
こと銭失ひ口にいたむ本名を向へる
たく思ひのそ隣に目ふいやすさりてあく　亜満

かけろふの勝にあへり角誹山　桂五

根まし（と）おさふ高木につかれ雲　星阜

つか桂花桜の字名を称し行ひて
誹云宗家のつきに門生てやと
及る一枕を行て家の今ける
夕まみと成ぬ　看古

手向るや宗家のつきに宗匠へて　庭甫

歎ハつ見るより権もおおわ家　物栽

鳴咲に也ハうこく枝の陰寂し

止らぬ人に麓の関もなし　桂二

阿叟常に好く嵐山を賞し
給ふ

我庵しひハ花は嵐がむかし山　蟾角

さびしさも人情やみハぬるむ空　不遷

ちる花ハころゑハ隔りてりや不　桂裏

初七日　枇杷園與り

梅柳みんなも涼しき月のぶ　士朗

うつまゝふ雲のしら雲　白図

楫柄を摩りかま柳むけて　儀青

蒲團のみを入ぬるしたり　閭毛

おそしと秋の風伝胡の声　羅城

豆實のまゝるや蚯蚓鳴くらん　臥央

右一頌下略　以下同之

同日　朶凌舎與り

それとらひ情といひし雲の雪　紀鳳

ゆふへあしたのすゝしさひとゝ　彪門

あるは梅のあると句ふ袖のさくよ　沙漠

なかりともの又よしらき月　昆明

掃つくむ秋となりゆく墓参　少如

二七日　桂葉下與り

月もあそらしふと激まり墓の主　白図

風もなくて芝草の上ゆく霞 — 岱青
瀬白鳴声よりかぬ藤かせ — 士朗
琵琶の緒の破れはいくる — 素外
四方の中沁うしき秋の月 — 闇毛
さらぬ寺院るく水のすゞしさ — 臥央
遅き日る鍋の野鴬を聴ゆる — 桂五

同日　灌園興行

月も紅葉も物言の闇を深うき — 馱六
悩む総出る紅葉の名れ垣 — 満子
海の音昇秋の雪鮮て — 岳絡
初くもへと声ありふらぬ — 少如

寝もしこひとり座敷さして離家 — 庭甫
火ともしのこちきり鍋出して — 羅城

三七日　鉄後る興行

わかふの木の芽紅葉も滴すむ — 素外 少如
もの寂しき春柳の陰 — 臥央
蛩ひ紙燈ほまれとる据 — 素兄
隣へものを問はむとすり — 雨滴
明なれし絹なくて磨の雨 — 巨川
三ツ出り蜜柑ましく二ツなき
秋ふけしちて見る蟷螂の足 — 白図

四七日　寂静庵集り

何ゆゑも雨かふる暮の呼子鳥　羅城

桜もうつるにちらしなきなかめ　白図

きのふ来し燕古巣に立出て　宮毛

汐浜を海へ行の灘　岳将

旅人をむかへのつかき芽むしろ　岱青

夕かすみまつ淋しらせ哉　万岱

同日　素兄亭集り

師の教たよりに俳諧をかり寄ら
日々をはしてかるかならきにおひぬ

俳草魚になりもかゝぬ梅の奥　素兄

ゆきゝは淡雪もなききえ哉　五周

角落し鹿の額を撫やりてし　駛六

きのふ見しくらなるひなり　麦外

三日月の夕をとうき古まくら　卧央

同日　春日居集り

ちらちらやまちろの嵐の雲　彪明

柳の花見る色を手向行　沙漠

蝶鳥のうけ近わりく咲花哉　紀風

桜は山のうちまでそおしき　吉甫

蕨摘もなかしと蔓へし霞　士朗

雨のあかきのかほそふゆふ雲　昆明

五七日　一句并贈り

わすれしとみしハ萩寺の月　桂五

とぶらひくるやまゐるもの影　臥央

萩紅に滝のしら玉数そひて　白岡

車の通るにちはれくりすぎ　岱青

草鞋腰ハふところに押まくり　桂裏

代衣をへりしぬりこめのまへ　言毛

同日鳴巣　贈り

まなつきし風をものかはひとり　徐英

さびしさ然る蓑の冬しくれ　士朗

三日月の月を膝をおりみて　亜満

人ゆくさと斧おさむあり　羅城

草をも霧にも諷ふ任の春　方岱

歳問越こ来る　わうきれ留　少如

六七日　岱青亭贈り

俳諧乃法のむかしや雪月花　岱青

化佛囲遶のうつ花波の末　所識

春の名水まさし春をそゝうけん　桂五

氣をかしまるに人をみて出る　岳洛

すゝくとすかり白も黒小袖　少如

卅の法つの夕しくれの雨　士朗

同日　十字庵興行

茶香のさらしやらも世にすき哉　圃曉
春のゝ緑みなが茶のまがわし　卧央
戸出るやく茶を田中のわと繁　素外
浮れ衣の袖のちらひさき　凢鳥
三日月の端より歸る秋の雲　雨曉
袖しほる歌舟のすゞしく　寸長
数珠すこしなけれは露とき鳴田の声　湖里
法うしろりう出る家すゝむる　五周
晩鐘のうね寂はへもなきや　沂風
風なき風のゝ面歌しからう海　巨川

春かけは沼ましての嵐の雲　扇里
二羽たちわかる鳥の夕暮　桃平

七日　五周亭興行

師とせしよ茶の桜の小淡よ
旅宿をしても松もひ出かな
小海に涉りよふらん春の雲　五周
鳥なき奥の月に花の雨　白図
枝なるき花本の葉を摘みて　卧央
日くれるとも戸をさゝぬや　士朗
名月のきみふを惜む夜の色　物栽
萩ほけ夜露とつかはねる　素外

うゝ旧のおと吹かへし秋の風　　庭市

百箇日　暮雨巷集り

縁なすきたよりか今朝の郭公　　白図

百日もちらし外の花の陰　　岱青

下枝とる松より家を飛出く　　卧央

人さはぐくのうつせ貝　　寅　　大阜

春乃月花ぬ先から膳掛　　聞毛

紫蘇の二葉ふの手におちし也　　岳輅

流れし雀の宿の法さる翁　　士朗

衣のやふれ法る低しさ　　徐英

鐘の音のうれしさに響く雨の暮　　昆明

十二許なりハこえ流し　　沙漠

馬に附り酒樽を引おろし　　李谷

忍術たりる人のまくらを　　素外

帰りし家廿日あまりの秋の月　　五周

雲のうしろをとめたる水音　　大年

焚つけも足むつりしき栗毬　　紀鳳

勝の旅に浮綿をいそえる　　万岱

きさらぎ紀の花ね井に咲出て　　桂五

すゝきまで雲に丁のかや　　物栽

四十とせの昔ハ夜壽翁に舎しみをたつね
きのふハ夜話亭にいそふ遊くハ嵯峨の
名の秀て芭蕉雨に名跡をつかしむかハ
六十一字亭ハ古椿はとれるかおきつや
ハとせの數経しても入らや花の散へしと、
いかまおもひつけむ旧知己をいて思ふに
老の吾像の墨河たきさすき残號しるす
このきそうに銘りて棄をそ手向たる筆
ありけるも
名をとりへハ睦月もおかしき喜發　逸筆坊

花生らく　河そ両京の鬼と
なりしなるや我徒も魚を失ふ
こゝろし天を各あらたり駒鳴を
すて東洗ここわらハむかしに
吹送れ　　知多社中

春雀に巣ハはかれし岩かな　墨山
鶯の經やおもしれてわすれ碑　北雲
菊花の隙をのいたにうちうり　大魚
菊になら紅にみなつ菊なれくら　士峯
雲のよに名をかけて伊の切言か　冬和
それちりて今ふかり彼すき月きれ　玉帯

月入て多まし む梅の匂ひ哉　兵士

立よきし翁子松のしらくかな　默鳥

折から勝を出せる諸君子に

梅ちりて蓼咲にわり百子香

問ふ事きく事ハいつ終ると

おくる世し月おとくるり先ト　作二

なり川入りハ夜や

わけましき身ハ鶯の声着りかな　大阜

去年の秋ハうち流されひよ舟を

うかへて鷹兎筆をもちしてなを

おも入て

春の海吾侍の目をとはしくす　蒂梅

梅ちりて涙ハ浮なきかな　聴呉

なふるハわかみふとなし我なさき　蕿兔

おもひ花源し睦月の雪よ縞のいと　北橋

子の日には根付きものふるさかな　兆如

春の風ちからあまりの煙かな　也梁

浮かれし花遊し梅の夕かなし　台冲

機されば弦よては月をとる　若酬

寄もなく消るハいつも雪達摩　渡鵲

さむしの花みて涓こぼしけり　葭凉

誰とあをうとなし梅の匂ひけり　以息

茶ちりて鳥啼雲と成にけり　如泉

梅散て樹まるき匂ひかれ　曾朝

花の低風情を忘て胡蝶かな　井水

丁ろく停や家の花銭かな　壷仙

ちり際ハ河の芸となき拄かな　里友

花のちとに松笠そりけりに　仙凡

拄し出ん桜のかけの尼りかな　竜渕

ちり行きや知の宮に春の雪　吾水

惜まれてちるや一樹の梅の花　さく女

是西に入て東南の人の眼を際　千久有

梅散て香もなき春と暮にけり　且有

新まけハ葉の花のなき日かな　木人

加和しき八ゝゝし二月の月夜かな　佐屋桂中 仙兒

雲の雲浮し加て気や松の月夜　之枫

梅散て松のあ桜の落ち梅哉　梅呉

月の花は雲八消る松もひかれ　梅丑

翠と飛く八月なき雲の雨と藪哉　巴江

月入て梅に白ふ手向りかな　安之

納豆の花のむらし讃りし雉子かな　米汁

淡雪の鵲時に向となりにけり　凡止

うくひすも紫あり花に囀りけり　善田新田 百兒

柔菊にはなれ捧しも手向けり　笛新田 等先
まちの膳散りし花のあとゝなり　ツミテ 青霞
人去りし跡ゝ一面の秋となり　敬甫
宗匠物故の御歯社中ハ觸穢の憚ありて哀情の
句なども捧奉らん本意なくうちしのび侍るか二歳競ひ来て
此卯月百ヶ日に成られハ今なを已て追慕乃
おもひ堪ねの人魂にうたへ侍りぬ
たより残る百日たちぬ若稚子　ツミテ社中 木吾
ほとゝぎす聞くによへ百ヶ日　梅虎
郭公なくにはなても西のそら　仙布

たゝかれし世をも帳の痕に志のふ　帶室
古人志らぬ風情ゆ百合の香の雨　兎石
花盛りし世をも奉るに中の実　亀六
いぬし年の冬暁臺宗師に在りて此世を
旅病に臥ゐ給ふ良薬旅ゆらく趣ゝ立
旧のことく成ぬる悦ひをつかさ深かりしく
春立卯月に家て悉とのへま里にわたし
ゆくゆくと見へはうけらひうつりを辞し
侍りしるはましを短冊の墨もかはらぬ
猶ふ中しろ帰しを人ゝや洛陽の

文つかひまちて嬉墨睦月廿日ゝ立日
旅人の数にへぬる事を告終るよしは
折まる筆捨しく机上に取落しぬ
杖折きてそれに　涙先は泪かれ　清秋公

普善　芳出略

春住くや…き書のこゝろかれ　素里

正月梅も柴より募を笠寺か　イセ川サキ 逸漢
実あるへし去うちは山紫を　信州イナ 伯光
嵐菜の坊方あつりし西のゝ　スハ 飲徳

さつき雲の…なり　素鏁
墓ふ多の梅ちりなりみ…　遠州 可明
限るとふ…陰陽の廿日にす　十六 耕水
師の…ふ…
わすれ…亭に喪こもりて
其傍に注…
…の…　三州 入素
雪解く…香炉峯　周勢
…　等近
…の梅むし　亀棋
…八…月　仙李

梅ちりて雉子すきなはよやさき　几鴎
梅みれハいよ〱ちかしなき名哉　貫爰
花ありし雪乃山人惜しあり　圃来
すゝしさ芳よ西雲海のる渡　素洲
年の良夜の吟をおもひ出て
今そ知る鵜
あらましといはれし春の風　奥日
よし川桜のちりても名なき哉　卓池
暮ころの朧たちしもおもふ風　桃生
師の物故を吟て同社補閣
して詞あり　初七日　捨香

香の煙七日ハきハれたのやむし　趙皂

追悼之俳諧　奥州仙臺社中

文夜からうてもえそぬ露さか　大芝坊白居
あらもしてもとらすの舩　万寸
忘れしる流に覊やぬらすらん　雄淵
あさつらむらへのかはふりころ　北凰
惟泉さき明やむさき戸の車はる　渭原
わりけ日ハ何もさてある　棐弧
南ゟとおちへと膝の綿をわれく　冬湖
蒲田の風よ見るなくとうすい川　風亞
逃るとも秋中しもの赤松の梢　丙舎

吟しふらくさむ那智の滝原　六甲

等帥く緩きハ槐とふいまくり　風射

白ふ社のさわる　居　巾大

毒喰く子宝の葬ま新を言　雷后

ふり構ましく　ひふの神なる　局明

非一廟の方しえらりみつんで通り　杜嵐

寺院家ハ寺きししき大　北固

夕は未ゆミら沙ら波ぬまは浴池り　猿眉

雨ハ小降く揮うこ又人　蔵　管士

売まのハ桶湯の菓子は股挿く　曽外

身の衣園は貰ちょり閣　伴序

寶方の松くりし花のおし扇　南平

持止む鐘の霧あてらへ参　図毛

一葉の八日ハ百も抱せらく　完山

寛くらへのまけなりたり　寉鴨

家もちを妹ふく坊主と篭や見　新肆月社

右百員　一順下略

雲ゟ似くむかふ茶を急りや坊　万寸

香乃坊く松丈へハおもしふ廿日ぶ　滑原

かくしえハとしふらく鏡るや寸ぶ　凡射

井中らの紋けハ妻のわらしぶ　北凰

梅の月蓼はみし木そ恋しくえ　分字

かゝるてふ月よのはるゝとの霞の雲　南平

また〳〵それの法ふむそとのあつ〳〵

ま游ぶく猿さる続の庵ろそ今ハ洛陽

大雲蘭若ニ一筆の塊をとゝむる事

くわし

喘く息ニ聞せ林の葉ニの動くのミ　僕茸籟 巣居

一周忌

寛政四年正月廿日暁其堂大人みうせ給へり

都四条坊なる大雲院といふおくり

其處は葬り給ふやしまさし生れの所

古挿済田洞仙寺ハ父母の墓所也

そのかみはらに大人乃名印ひとつを瘞み

かの文のまくの塚を築き追慕の紀念とハ

なし給ひ去年の事を営み給ふ日ハ

かなしき中に坤を絶きあらそてうち

はゝ之業のこゝろみりはれにて何られともち

すき給ひし今年のたゝふむかりといふ日に

其塚に詣ふるに苔むしなから

ますはく志るき文字あり〳〵と勝けなれは

去年乃春塚築く業し給ふ日よりも

猶あはれにかなしくて井く絶る喪

なるりし身のうへよハ扨せうまさりぬ

くふ部也乃人々ハいつよかきられたまふ
よ加らとよわきる能をうけ給り

身よそゝやき者や　絽の笠の露　士朗

一世勢乃左衛事一日よりも
猶速也し今般よ先師むつそらの
大悲蓑俗の諧歌を携へ写そて
游らよ他そゆしきらる他わら翁や
風羅一宗の讃誦是をもて報恩とし

門弟の満くとし
毎年みそ法の筵　白図

社友のすゝ筵ニまうをる暮雨菴乃
老秋を守るかれうなふ也阿叟
一周乃忌なを李家上れ打葉を拂ひ
採葉振香しる人々に俳諧の
まいろいをすし　些し

素よ月あり
草ニ葉よせゐる　臥央

跋

渋渓慟哭農句古撰をあ津
免可蕉梅巷と以ふ盖蕉梅花を
其時をかなしや 者鄙
色際能尓ほひ何乃美 手ら
あ雅まや

羅蝶記

寛政五年夏五月

門人 卧央揖

俳諧の正風を口ら尾張の玉を吹靡わて
多くの日能み歌仙集ぬる能かの芭蕉翁
俳諧しある他人わきさへ意尓知須ぬ
とて身をまかしし尓風雅しゃ珎し鄙
をとりくの昨りし尓多くかりに出てまで
たまへり甚しろ變因ふ諸でゆひ言し
社頭の大に被きたる夜遊志のふん能
やましまに生ひあるそ中くに聖愛よりも
んとしやまりたるやヤさえたるかそ能くもち
磨きぬ隷ふ造営をよろこひ为鶏鳴と

本メ集

人の世ハや佐屋の泊に仮寝せられし哉
海道の鴨が声白しと云る芭蕉の
ざれ言にんせよむべく笠寺こそ〳〵し
ありきなりしこそ年もはやく至りたり
代りし小田が行そとりに耕き人のたつるも
粟稗のたくはへが菴を損ね入刈田の
鴨に清栄をなすふゞ帰るもが
多答にハありけるたとへにも似けど古意
月をも詠め出て筆すくらゝ天も時雨るし
雅をもなむ或日書林風月堂主人
花もやさしく覚えて志りしよりて

休らふ所にて雪の降り出しけれハ
いざ出ん雪見にころぶ所まで
丁卯臘月初め夕道何某に遊ぶを
興じ玉へるそかししかなき
芭蕉ハ風月堂孫助が秘蔵なり
いさしらハて乗業なり
其句が古きをとひよせハ亡き家の久敷も
みめぐたし不肖士朗百年の忌を
とふらひなつかしとしのゐに脚つけてる／
わが腕答而叟によりて云へるが背三本と
あらこりて冬さ半年としのひぬ門出

何の幸ひそや吾伊の葉ゐそやさましや
吾師も今ハなくなり給ひぬるふわさ
風月堂井ホ席を設けて人々を會へ
此も尓翁の真蹟ホ拂して示さホ
まきの後を次く

麻刈集
雪之巻

いちらハ雪見ふころふ雨まて　士朗
百年ちむきを鳴のまへ　暁臺
塩むしろ洲繊いくら皆裂らん　朗
又さし出た影の燃えさし　臺
山吹の番を取入節りふく　朗
鶯ふ息きゑらぬあゆり　臺
桶の底かくりとぬけて雲の花　朗
ゆるきるヶ日末降りけり　臺
信貴し伊賀の石切来逃して　朗

是なしハとて了巴を破る　朗
執着なき井あるゝに下居て　臺
いふも焼場なる嗜り場る　明
ひちしと詐却し出る月代に　臺
貝売様さけるゆき風　朗
露ほきもや棠にうきちに嵐の尽　臺
木質の温泉に猫り剥る　朗
刀賣る人に出白ふ毛のつけ　臺
破れ泥塀を渉笑ま敷　、
表の雲一時納茲の錆ぬあり　朗
首をたそ子きし戸ひし推着と　臺

渉扇人免りくもにまぬちあん　朗
梅まなきし門ゆ綠か酒　臺
烟そふて柎涼しく紫ふり　萬岱
垣よりま出る水のちゝりし　羅城
光沢に掛を玉りと手に上ゝりそ　岳輅
玉を下向のちゝりき胡明　閭毛
父を松母を極となるめちや　岱青
浮世の色をも風の送り火　蘭水
蒼る夜の峰を波よりよるや　卧央
稲すゝ勢ゐへ房なし嘘り岩　彪門
飯てうに衣一つもなきおにか　紀鳳

月の盲るやすて取く日本紀　朗

鈴なる竹の戸締か山かくら　城

寺をふすぬ人出てハなし　青

木の下ふ汁も鈴もさくしぶ　鳥拝吟

虹の鳴日をとへりも長栄し　白図

雪のりえ多降りける日

枇杷園ふ参らしける

雪ふてる雲の麁兀ちろうなし　暁臺

梅一葉ふ抑るやすてハさたへなり　帯梅

都の饒たをりんめくらりも白るよ

人くの家居ハいまとこツろ一ツ

すもたくすむくすおりあるゝ

枝くゝ草もひとり葉とうら

紙をの都ふうまる板戸敷　士朗

菜室

枝炭ふ見え白ハいつの落雪ほく　識室

落書やすまと白菊あてうしこ　梅呉

白雪をわろきのふをハ東山　聊于

きゝ鳴と帯くり松の雪蕭々　杜常

泳くし也と吊もなし雪の山　季波

奈良坂や鹿の尾に見ゆるたなびきの雲　青峯

衣きも着は濃紫よけれ此雲　岱青

ぬらしも雲に露もす薫なれ　間毛

書懐

身に老のつもるはよしなしごとの雲　白圖

降る雲孫そのにはけしぬかしきかな　文陵

人の行方しらずふらふら風の雲　駅六

雨尾山にて

赤松の雲とちなまし流行哉　チタ 木人

はくしと雲のふるてし詠兎なり　信スハ 自徳

茶うなし草の雲に置此なし　ツミヤ 木吾

呼続松風の里をもとめて

雲に出て人蔵の岩ある霧ありつる哉　野央

萩の露読みなさし霧よまさりけり　紀鳳

雲の雲よきるや楼ハありのまゝに　沙漠

雲の日やかほしくるきものも哉し　羅城

風之吉

秋くれし銭身玄作象に似たるかな　白圖

雁に声をつゝみのよ此待

砧うつ遠山かしの年しくらて　士朗

魚俵漕舟もらしたまり　徐英

夷おまたき風情やのくるらん　圖

桜をとつぬ人とてハなかりし　朗

登八事山

ほとゝぎす佛の貞のきつかけし　岳輅

ほとゝぎす隣のあきし日暮けり　卧央

風やすをまく山のさゝかしき　吟幸

こゝゝす山又山のくもりかな　古常

来の鳴て木ゝゝしやける吾家けり　啓甫

ほとゝぎすとりあけたる初鳴けり　騏道

風の夜髪ゆかし破戸けり　五周

こゝゝしの呼つめてくのゆしたけり　岱青

虎足菴の冬のたゝき八岸高く楕なし

士橋をつらぬ足とゝろ小九ときる

ほとゝぎす私なきしら答む樵かな　白圖

京東みて

ほとゝぎす八小町か死て幾世ふる　趙危

ほとゝぎすや海一筋よ出る月　士朗

こゝゝしは落来る深山のくきけり　入素

風や夕山色の啼して　卓池

こゝゝしのをかせどうらむきに紫かな　曉壷

木曽山中

停て夕も日も木からし跡よりあさり　桂五

木からしや後架ふかき神のかみはるる　羅城

こからしや花のうへの月夜かな　芝 丹戎

ちどりの中しき

星うきの雲をみよとやなくちどり

附西の中に落る三日月　岳輅

小院を挑す芝附の冴て　士朗

人のよこ松に應る　呉井

ちふ路賀ちかくつまでもかるらん　輅

宝蔵ぬるをかさる猿曳　井

串に鯖をかけるも海士の家に　万岱

ゆきむかひて

高浪や千鳥飛てよりの家

伊勢の海士の妻もかけてさへ啼千鳥　臥央

遂吟

啼千鳥硯の海の水の本に　闇毛

加茂川や少へ啼り小松千鳥　東 芦涯

酔起歩渓月

同の覚て見ゆ八寺も川千鳥　東外坊 玄之

かいくくゝ鳴ちる千てら啼千鳥　巨川

いそ千鳥ゆふ日さ[illegible]の小蔭かな　　求 桃睛

湖邊

古巣や寐ふり白帆もなく千鳥　　羅城

夕千鳥湖ありきちくめし〳〵　　雨滴

夜はしりの沖に楫ふ千鳥かな　　素丸

磯ちどり沖の千鳥と入かはり　　木人

浪の上もむれ〳〵暮る千とりかな　　岑之

むら雲行ハあとにみゆる千とりかな　　風止

三河にて

生海嵐干汐秋風さはく鳴千鳥　　士朗

冬嶺江上に暗むしく小舟鴉の寒さかな

見廻りて

夕雲は松風のほる千しりかな　　曉臺

むら〳〵千とり風の花もみえけり　　李臺

鳴出ては〳〵しまのをつたひけり千鳥かな　　岳輅

むら千鳥うち越えて岳の松の寒さかな　　岱青

鴨の巻

海荒て鴨のあつまる洲の中　　沙漠

懐りて海のあさきつくの火

枯蘆むしく岩のあつまる寒さかな　　曉臺

霜の枝木の出る月拂ふ胡　蘭水

寒さふる壽山人の壽須かな　曉臺

出柴門

冬かれや日ハ寒々と海の浦　聞毛

ふゆ田から見ゆる川堤之衣沼かな　看古

吹からへ吹かれて枯るすゝき哉　白圖

難波入江に古きを尋ねて

かれ芦に浅る寒き三日の月　呆虎

冬枯や何を見送る鹿の耳　岱青

捨果し筆もてもなし冬木立　京 閑更

冬かれや錦かくしの夕なぐれ　サヤ 仙児

寿天に河色の芦のかれし葉かな　曉臺

霜枯く鶯の居る野ゝ夕暮　仝

枯草原頭有感

いろいろの出ぬらしや冬田の雲　少如

なふの日も霜の家や枯尾花　現山 三止

一ツ家の軒に捨たる落葉哉　芝麦

畑中に柿一本の落葉かな　士朗

冬籠の炭

金屏は松の古さよ冬こもり　岱青

雀来て啼なさの木かくし　暁臺

呼声や綱引の縄手ふつゝん　青

膚寒し机漉ふる山影し岩泉　臺

旅衣にいなづまかゝる月は寒　青

若も忘うも拂ふ長刀　臺

秋悲しみ乍は柱に一首あり　青

梳出きたる酌の方のなの兔ん　青

霧はれも艶書は浦波たちそ　帯梅

妙法花経を埋むとときふ　大阜

他家の子の主に家しを驚きて　青

尾張あたりより布とく浜焼　臺

月は鳥に仮乃四阿なしきとり　阜

秋の夕すてたる寮のいまり外　梅

笠張り雇に粉まる小僕　急し　臺

そくり眼たいも病なりし兔ん　青

花落る主飯目はかなむしろ　梅

あるうに露の葉りすむみり　阜

幼住菴に冬籠して

火桶抱きかゝさ孫ありし小家庭　卧央

世を蝉のすさまじ行しん盆経　暁臺

盆経うしろ八日枝の鐘納て急　岳輅

むしろ戸や月八あかりの盆経　美 亀大

萩ふんすゐる根もゆかり盆こもり　士朗

二三日八二妹乃志らす盆あそり　昆明

盆あそりする里ふゆふ秋や宮ゝき　京 嵐月

山の奥ふも田一枚ふ西こゝろ　羅城

は奥ふ人をしすゝてや盆こゝろ　美 兎石

或人の油くるゝなり盆あそり　北橋

閑歩

一休の意麻とりんふ西こゝろ　白圖

わか友間毛鞍仕て後花香川のあよ済ゝ游て菓を煮るさきをるんたのしえなる

宵月桂しけの奥なりふ西経　岱青

旅ゝ麻の去を

たひねよし岩みを師光の夕月夜　昆明

市のほとりのうしろく埋る十人　暁臺

歩り人みるつけてり志り梅よ

夜も若菜の日を風情あり　明

八月十四夜湖上を出しける

水を松もしふと立きりあり波の行　白園

雲のたひ芽の旅をおもふ月　播州 玉眉

わか旅ハなふをうきりおくる親　岱青

一日ふたひや芋綴り萩の花　華 仙布

秋風にねふたき砂の面かな　卧央

刀祢川夜泊

霧を鳴て松戸の渡を夜のゆく　亀門

さよの中山正月あへも春かな　七丈 一音

ほうろしの笠をつくる旅寝かな　貫友

九月十三夜も十三夜にわかぬ七十三夜の

清興うさけのすかり乃ハ好く舎中の事え其不手ろうえ寄神田川の支流よのその八ひらひそ乃古園の感かり

名月夜にはせまりて後の月　暁臺

旅ハどのくまくらさる鬼と新扇　少如

衰なる人ふすまたる尾花かな　仙臺 巣居

萍や伏見ハ名のちらさき窓　桂五

三日月よ蝣よ岳ちる伏見膠　岳輅

大圍寺縄よにて

吾妻のゆきぬハわかぬことかな　沙漢

冬の日は稲うつくしや石部山　士朗

虫は音やおもくハ高き山の上　巴江

檜に霧の立こもるやまおち川　物哉

片瀬八淋しき月のうつりかな　伊奈丈

箱根山を下りしころ光山よ
のぼると姥房州をみわたしける
閑寂又たくひなし鉄牛和尚が
開基といへハ

鉄牛をはむ蚊も気高し山の上　大阜

蚊屋釣らぬ寺にも枕ハ立になり　昆明

瓜買て奈良の七条覚えたり　聴呉

河原蓬か井に咲にけり　同　非如

うつくるや毎誦をせける濡蒲團　呉竹亭　桃生

○子東か東武に行を留侍といへる由まで
送り来りて

暦の夢同し夢見て別れけり　士朗

あくりつちや宇津の山への廿日月　紀鳳

年暮る日まて

年暮る月雲笠着て草鞋はきなから

川尻にさしく来むしろかな　紀鳳

梅柳さらくと枇杷の花ちりて　暁臺

今宵の連歌を書なしたく　士朗

盃にうけて出そさむ三日の月　鳳

常に射もある軍

人ハ川にて魚つる秋か

明ぬるの人にも年の名残りみか　菲城

出そ讃く年を惜むら沖の海　閣毛

年の日数をおしく秋ハ又惜しく　騏六

法りなる年も川や浮おち戸　臭日

をしめとも身に添く年ハ宮に見　青阿

落る歯の抑て年ふをしきり　暁臺

似合しや年寄る人の華羽織　沙漠

蝶拂こす渠きるく見ゆる哉　徐英

くまし牛の菴にあまる蝶拂　圃暁

市に出て春蔵をとりける

年若ぬ松葉角力のあるとひよ　士朗

年の市人つきけり左半の尻　卧央

身の奥又切てなそえ花の奥　五寅

行年なりもことてをりよ蝶拂　蛙聞

燕の巣をはやまるになすし拂　貫友

人間の彩色元て年の名る　飽門

嵯峨に行人ハ婦なり春の暮　熊本 里采

春もつや日あり帰り天津ナ　岱青

行年や人も落つく螢の声　紀鳳

春の暮梅の香間を住居かな　岳輅

おもしろく更たり梅を隣座敷　昆明

春雨即吟

笠着やもしぬ窓も春の雨

翁ちらしと梅の也　騏六

附ねしぬ名を梅にたてつらん　士朗

人そもそうしき碁を綴る窓　満子

降れ雪おもき薄囲に目覚まし八　六

萩散たりくにふくむ一陽　朗

山居

梅活くらき間崩し春の雨　岱青

春雨や山のうへまで月よさし　岳輅

花散鳥のうくよと人ハ春の暮　物哉

春雨のあらくと何ぞ更り行　羅城

逢坂を越る日

ちるの雨半の額を流されり　桃𫝊

春の雨雅字夜に似たるかな　庭甫

よく笑た春雨の隣葉屋かな　越毛

二日降て春や雨のしつか郷　駪六

幼子の夜中をとひや春の雨　士朗

梅の木のすくくさに数く春の雨　大年

鈴鹿山

春雨や菊菜の花に日八ふる　玄々

ちるさめや夕日にうつる山の炭　閬毛

けふのは見よし丸八銭押合　昆明

春雨や村の菜にしめに就田川　圃暁

春の雨松の木の色に松やある　蘭水

けふ雨や枯木のあたり降らし　暁臺

春雨の果てな合歓の実かり　雨暁

水鶏の声

水鶏帰る人の足はや竹の酒　閬毛

雨降おふるうの花の門　暁臺

篠の束なれやとして流れから　仝

櫻ぬかり足に耽のひらいす　毛

暁の隙あらしる雲にはや秋　仝

白粥する折　茄子川ゆ　臺

女郎花数に袖をぬきかけて　仝

地上八情風枝交てつまなし　毛

うき風の元に返して家の春

母にかく迄て魚にしりに出く　毛
七五三切し八枝の本の神罪すん　臺
呼智が名附蓋茂七夜　毛
月の前ワ並に飛鳥の宮あり　臺
打きゆる河をくみ抱く繋　毛
弁儀抄杯らしおらす貝吹て　臺
小銭書めたる借宿なり　毛
花基十日も前のたくこうく　仝
多汐さるよ藻魚稲こ由　仝
砂原にあるもふるゝく恵露　臺
人に八浪しゝく車巻りくり　仝

朔ころの神の鼓の音をし　毛
楷の火ゑく月若ろ帰よる　仝
雪落の半をきまけるむさぶりに　臺
せんすへなしの帰り俗あるまん　毛
洗し吸硯硎の數の落くあり　仝
縄つけてむし橋のうき板　臺

独坐

門涼し水も汲まし水鶏なく　楚分
終日て啼りあり鶏も身のこと　闌更

水鶏啼り東ハ落雲よ下の川　岱青

醒井にて

ゑ鶏浮んちらしか海き濡ねハ　帯梅

水鶏啼り夕にちるかをし杉葉　騏六

白妙や茅にとりて啼水鶏　五周

昼のゑ鶏尻たゝきを留守ハ　雨滴

水鶏啼井の中川水くらし　青阿

ゑ鶏たゝく音と覚へり妾にの　暁臺

二人と八人まさ想ひの家啼水鶏　紀鳳

啼やゑんはゑ鶏見えたりちらとと　士朗

水鶏啼や燈る引く一ツ也家　白圖

佐屋の泊にて

舟に福て宿ハゑ鶏の舟たゝく　幹亭

池のめくりも又降露や水鶏なく　閭毛

大風のうしへ出でなく水鶏　桃鵬

むすぼれるとて聴ハ水鶏なく　勅哉

鴫の巻

剣あとや
早稲かりくの鴫の声

十日かゝ身の先る柿竹葉　計之

落る歯をつゝむ袂に寄かゝりて　士明

西行の賛

鴫立て暮けり芦のたもとに　闌更

ひハしと鴫の立けり西日の角　青阿

時雨や田縁の鴫のいそがしき　万岱

捨小松鴫のつゝし並ひけり　梅虎

竹垣の外くもりけり鴫の声　昆明

鴫立やゝて寄けき足のあと　羅城

気ちよろし鴫の足く游流なり　桂五

三日月寺にて

鴫立て空の三日月見附たり　多宜

同しく

月落ていよく鴫の夕この角　之楓

鴫啼て雲のたひあるふもとかな　雨暁

月出く鴫羽や水のすゝしひに　南溪

夕暮やとのゝ汀は鴫の声　米汁

鴫啼て舟の夕飯急ぎけり　騏大

草菴の巻

栗稗にこゝろもあはれ草の菴　丘

秋の声ありむかし夜がたり　卧央

うちあくる蔀の外に月出る　士朗

漁の海士に墨をとらすり　素兄

すゝきまハ郷しちらしと鯛ひ売　央

茂の花ちるたつのあなの　兄

間居

稲居まハひとり万歳来り見　尾張 丈芝

檀渓

霧にかくれゆく行ゆきて栗の畑　士朗

汁白の栄るなもむきにふくまて

ワ連もて檀渓山中に尋ね入ぬ

附ハ二月の二日なり渓のあるじにもそ逢

そしあらしき菴のさんえんまハ

あかまえく柳ゆり旅の旅所　岳輅

隈く の雪きき林の中へかゝる　蘭水

山路のこえまで深き梅ゝ家　閑毛

田代や紙状によする萩すゝき　白圖

秋の夜の深かうくよる烟りかな　信州 素驥

扇根飛雲夜ハこうしく茶みなる　同 芸門

紛時をとゝめても手付を梅とけり

来つの来や生花落る梅も也　岱青

次は分八附南の杜飛ぶらうみなる　魯衛

長閑さや胡蝶宵寐庭もせり　帯梅

鳴ぬ時ほとひ見えたる雉子かな　京 百池

ちらし萩ハまもなき枝の光かな　満子

吾影の松を見て居る師走かな　騏六

門口に松並ひろふ霰かな　大阜

きりぎりす鳴や藻のぬきな汁　圃耒

題画

巣立の桜ゐしと鳴なるかな　入妻

跳し所に蟬もむくり菴かな　羅城

口の字の梅ハめつさくうゑの花　暁臺

春寒し海苔擣ねの落月哉　桃生

夕鳥や這入るともの菴さし菴　佶室

萩咲く蛙掃出は小庵かな　巨川

稗鳴て志毛りぬ山家集　也梁

月の巻

なにをあるたとへにも似す三日の月　羅城

見あるとのこゑ露なりけり　暁臺

ひよろ／＼と小草みえとの来な　城

兀てゐしき山路井ーさ　臺

撲ちまろつきち弦はりて　城

ゆふきみと年のよる愛き

林卧

萩萩やそこゝまてらし二日月　士朗

二日月後の波にかくれけり　羅城

三日月の笹のさゝ合ふ光かな　騏六

三日月ハ玉のかゝるすゝしさか　蛙岁

根なし草引あハ夕月傾きけり　卓池

月落てやゝさ宵なるゝ罪なかり　岱青

鷺の声月のくまきえさかな　桃臙

林弥菜の家弥庵の松のいもし

孫しくるえたるも八志し

ところゝえしすりのあゝ

松影のなをや月に入て有にけり　士朗

暮友吏にあらはれて見ゆ秋

さらひみゆる

二むりや見ゆみゆる秋の月　岳輅

月の秋中にそのあらはれ漂ふ　吴井

月の光まてふくふかく車のはみの上　閭毛

松ふけつ流しつ歩り月見かな　満子

月見まハ悲し古人を月に破り　岱室

平かに夜ハまとりやし杖の月　五周

代〻に見えし人の泪か月の露　白圖

行くて帆筵かくしんなふの月　素兄
見失ふ所まで晴しかな今宵月　青霞
さやけさに雲の堀りをなかの月　イセ　逸漁
秋も夜ハ月ありもつく嵐かな　桂五
風あ萩ところして月まちかな　卧央
出る月や海こえ出て面さし　蘭氷

琵琶橋

月出て橋妻ある下りかり　万岱
角のあふ萩ある秋の子規　南陽

秋闇然

おもひあまりて月を見ると歎かなり　換松

懐く月のさし込窓も紙かな　大阜
曇てハうし晴てハ惜し后の月　芦涯
后の月長きおもしの命かな　文芝

ひとりと宵の月にさすまとハ只
おもふ事洗むつかしきへの外
あそひらせてそ伝りきりをきと
手洗をむかふるのときさるみとしハ
あのしみ年あとし数の猫みとや
月のみ実るうんかなふや渥具の
名残をんかと去達ハたひねふ
一入あやしひくし袂の露も此と深

いかなるか給ふ色と目とさあして
又はなにおくるなりあしもつき
なき命ともおもはさりしかも
お国さへハ逢ましとかねて得をよ

寛政五年冬十月

暁臺

草枕集

草まくらハ尾張の西よ
仮寐せる日記草紙なり
時ハ寛政乙卯の夏新の
ひやゝかの風ハ吹ちるころ
なりけり

志ゆの
素梁

終秋の中山ふ寄り　素檗

みしか秋を横をりふせる思草　士朗

なとさハ啼そ山ほとゝきす　檗

我宿の雲を淋しき名ふ呼て　朗

墨煉る夜と砧の音を拾ちん　檗

豆出し月と思へハ秋寒し　朗

一本並ひ砧聞ゆるかやし　檗

門建て草の蔭由く水の杉と　、

夏の陣日余て京へいて来る　朗

沓作る宵の灸仏ふ目を閉て　、

同し齢ふ年を惜しむ人　、

批七部四上 弍

隔てゝはふ空ハ恋しき鳩の声　檪
萩もすゝきも月ハかゝらき　朗
撫子のいつの秋ふの根の枯て　檪
蝉殻つく杖を挽己ゝる　朗
ひしくと篠掃まする胡日影　檪
眉ゆひかゝりふ出ほにゝ神花　朗
完一殻衍かきちらにほ妻の筆　檪
逐ひて盃申すて扇る乞食　朗
ゝつとしく雅を山家にすゝめそ　、
秋明くよよゝ習ふ所　檪
时余来る多子小袖ふたゝ出し　朗

磐田の舟の稲かりに行　檪
這ふ聲のあな面白き人をや　朗
草にも雨まぬ恋を覚えて　、
揺の気にんの嵐吹つゝり　檪
風にわる三日月の影　、
塒ふえく挿し柳ハ黄ばり　朗
枝の流殻下総に入る　、
大風の屋さうに寝く破の端　檪
秋の後のちうくきうつ　、
袖妻ふ寂しきおゝのゆゑハそ　朗
摘やはますや若菜の色　檪

こまする方も花の雲出す　皪
同し旅寐を伊勢の菓子賣　朗
手の平に遣ふて見るたゝ鶉　皪
風の几帳雲ゐ迄りれる　朗

岐阜にて

鵜の篝消て七日に蛙のひゝき　士朗
むしろ引ける短衣裳 月　素皪
白雲ハ乙は乙女の袖のこゝ　傚青
桜の咲ぬ木ハなかりけり　朗
杉もしろう雛を揃ふる素菴　皪

山畠をうつ人も折ふし　青
髪洗ふ袖書を引かふを 日　朗
ぬくりくや出る家の　皪
汐溢小社の空もおほるらん　青
何をくふとも見えぬ番ヶ家　朗
草履干にそよらぬうり八百の壱　皪
あまれ蠅りのかゝる萩 京　青
人皃に消る斗の月 照りて　朗
扇の中をおしかて り　皪
大谷や哥の中山清閑寺　青
鷺も鵜白も蹄りはてぬき　朗

絹張に附く花の番もり付　粲
根をかくるる青柳の糸　青
岩に堰く水のやうなる恋をして　朗
膝のほとりに浮ぶ落葉　粲
子等が咎くるるを恨ぬらん　青
おもしろきやすて書草を刻　朗
風呂敷になふの風雅を売ちらし　粲
露の寂莫月の忠岑　青
落る歯を秋の名残となすあやめ　朗
枕動かば袂むしの声　粲
夕暮の星祭の壇焚続く　青
尾をさへかくす笠寺の坊　朗
芒ちる気に鉢買ふ便して　粲
花とつ枇杷を盛まで売けり　青
今朝からも小笹を遁れる人ぞとは　朗
尼に交りて投ふ川端　粲
むら雲は北斗頻を加へ流く　青
媚るき郎の賦を書て居る　朗
営るに十日あまりの窩かりて　粲
このほとりまかる花の志るし　青

待宵のやくそく

月浅や水鶏啼夜の膳のうへ　素檗
海よりみしるはらく甚山　域青
はらくと一押に紅の花咲て　羅城
小麦の葉をかつくむら叡　士朗
年よらぬ人の枕子を見てもが　岳輅
水へ這出る庭の造り木　紀鳳
うつほけ猿も哀さを鳴やらん　白図
きえて又星の緋のよしよし火　素檗
ありくと袈裟の襖を押やぶり　域青

雲をたゝみし鳥ハ抱かハ　岳輅
秋の都草縁の藤原辰細く　士朗
みうんを喰へハひよりか気き　素外
月の夜ハ若の人を泣せなり　物裁
ひとすりくと纏くしら浪　白図
名も知らぬ峰の擬りの色ありて　紀鳳
加茂の社に多きこうくらし　羅城
四五尺の柚花桜咲ふなり　素外
西波の笠をかふる　鉄　売　物裁
妻を悋む人にそろし泣いても　方明
連衆の料に渡る　業　船　少如

四方山は霞ぬ氣色の寛りて　延至

あやとろくありし園を尋る　布泉

せ鑿の白ひに向ふ難もすゝろ　素驛

小笹の風のそゝくに吹　昆明

時として水の音さへ冴しく　騏六

洞にうつる臥佛の良　徐英

娘家のきのふの輿を下されて　岳輅

雛上の泥もたえぬ秋の花　五絡

うしく臥屠見の松に嶋鳥　羅城

露に馴ね人の袖をみする　士朗

世をさりし時も吹する秋の風　信濃 雅近

辱臣此處に高く見申して

此二句ハ叮に友雅近ゝ伊勢

ようての餞別のたいられやとて

懐よし奉り桃把園に持來るを

ついて於りしゐるにハ乃ふの聯句　同 藝門

よそにち入ぬ

山深き伊勢の依旅に文をやり　霍洲

物申して見る臺の小まん　紀鳳

ちるかゝる花にわとりと日の入て　白岡

舟の螺吹がり出汐なり　騏六

愛在於人而不在於物其崇之爲
本豈有愛哉蓋思其茇憩焉我
園有　蕉翁手植之杉亭々亥之秋
大風不拔杉把之大雖可復培也
伐以材之友人墨山子懇求不止
手造　翁像乃安其家眉角骨相
是謂克肖非吾所覯止胡謂是
也乎

寛政丙辰二月

知足六世孫傳芳識

開眼之俳諧

目も鼻もひらきそめたく梅の花　士朗

霞ふきこむあらつきのそとつ　大魚

鞭あくる駒の尾も長閑まで　卧央

手になき流す水のさゝら砂　方朔

竹原に吉ふ声のひくらん　岱青

椽のよやすて秋ハ立なり　士峰

ひやくと月をもてなす琵琶の音　辨二

宣旨の使萩をわけ来る　墨山

岩橋のちらゝを海川と詠めやり　丈左

あくのあらきゆふうしき筆　默鳥

木菴ハとかく留守なる床柱　羅城

車のうち祝ひつめさき　大鵬

かきハちるる芝の下草柴依て　帯梅

きのふの色うつるも又なく　北如

ぬれしらぬ玉の絆ひろひ虫　方明

筑紫の根ひろうしくへき　大阜

有明すかる薮の実影落て　玉串

家ハ我家のかしきありうり　朗

古ろしと绡うつ樹の追り出　魚

松の下まで汚ばさちすなミ　央

秋風も一本の花にむかひん　朔

奈良の都の春ハ眠たき　青

うち連て屋根うに鳩の巣に逝　峯

さまたきあさりよき酒のある　左

一夕立の人を留る都しろき　山

そろりとこそしふ十対の葵蕗　城

毛莨蒲白きハもとのあつきなる　鵬

雲落かる阜岸為の山　梅

碧去の石をいくつも捨ひ出し　如

こちへ来て祈るるとりの犬　明

老僧のいのちを与の佛にて　阜

膳あしふみと流をゆりけて　甫
とのくけや逢ふ事の又難かれハ　朗
風も惡しく月もこひしく　魚
陵も隠れする萩の色　央
水冷しき盤の峰霧　朔
押しすゑ拈たる弓のちから也　青
ふるき襷の紐たゝむとき　峰
わくふるき燈の歌こえ元亨　左
百年峰ふる蛇霧峰　山
院系の人の袂にちどり　洞里
杉の板戸もおほふ曙　鵬

山の井の掃除にひそかなる也　梅
灰すふきなる肴ももれ　妙
桐の花筏引ふきたる星の暈　明
お笠の蒼気なりき朝白　阜
畑中にひとり家もつ暮の秋　甫
不二をこえるにさみだるゝ高麗人　英士
桜咲さくらの花の八重ちらち　城
うちくさなりてくるふ蝶　素

百韻下略

士峯大魚ヵ需に應して
風羅翁のこゝろを作る
爪はきをよしのへ向ケて刻笔　墨山
香華二句
陽炎を現まことの新法師　辨二
覚らし今咲る花のあらし哉　傳芳
花七句
来くと寄はゝ浪見り嵐山　暁臺
西ふ山の御芸語るのことく也　大鵬
ふつはけさやうに咲そりけさ　越巣
若草の花に来て蝶ハ獅子哉　文岡

一筆つて咲きへ花の麓なり　紀鳳
菊もすゝら花のちきハぞ芳枕　艸有
よしや世ハちらぬ雪を花の宿　京 文左
山吹四句
一ことと咲山吹咲ぬ雄身来　徐英
ひとたしは夜ハ山吹の瀬の色　大阜
やまふきのちるやきのふの幕の春　祐之
山ふきやともへねても花の上　亀年
一草四句
わら草や折ふしあるる人の氣　士峯
山とりの尾飾と言しきの子　玉庵

手杓来て沸しさかする芭蕉哉　三河　卓池
おもふほと葉咲て秋をうつし　大魚

月六句

明月や寺ゝ移り見てとより　素外
水引の花より細し三日の月　桂五
あかるくて泣人もなし盆の月　帯梅
名月は水のかけあるかとし夜の岸　士峰
西に見る雁は出すゝ芒の岸　信州　素梁
くきりなき一夜のたくより秋の月　仙臺　雄淵

梅四句

七梅し梅の袖をひたへなり　汝郎

梅か香ちよかしこのこほれ見え　大魚
むら見の咲里のまくハ早咲　英士
梅か香や野花の草の芽ぞ出ん　默鳥

雨四句

春雨のそゝくそ土とゆりゆり　駄六
春雨や昔さかへぬ風かふく　兆妙
春雨ハ春の花や屋を友　里も　青阿
精のとまる柳ハ杜のまの雨　物裁

雪景三句

雪の朝ひらくと見ゆれ見え　白図
上京やよそら向ても雪の山　士峯

山鳥の声さへきこえぬ霽秋行　万岱

鳥十句

鶯の佛よとまるくまつ哉　洞里

鶯の初音いもちを牛のむく　梅岸

うくひすよ鳴てきかせよ秋の夜　庭雨

鶯や古巣へ帰るのふ小笹哉　秋国

うくひすの啼ハなくても静也　方朔

五六町歩いて秋たつ雉子の声　艸人

雉子啼尾のとりまつしきよ情子責　少汝

水鳥の寝ていぬとも思ひなり　史道

足明や昼ふつり合ふ鷺哉　三河 入素

竹の家堅田よ落るよ帰る雁　士朗

虫三句

雲のよそ悲しさに啼蛙　冬和

なく蛙闇ゆく涼きものもなし　大嶺

蓑虫のわくまも身をもつ松の月　重羽

柳　三句

洛東の春をしづめたる柳哉　墨山

紫野の自由にわりく柳かな　汝羽

書様の門を屏風の柳かな　波目

雑十二句

火桶抱て加た膝ものもひ小夜嵐　卧央

松風のかよふ梅や扇すて　大魚
煤掃や風に吹るゝ佛達　、
冬の野や横きつくりたるの氷　才明
澗水右に細く黄葉左に
連りて雲に鶴懐につる
行くて今は冬とふたり秋の山　士峯
野は冬と枯る衣ゆる跡も見えず　青霞
秋風のそれかあらぬかけある艶かな　三河 桃生
蝶冬の人も冬きく秋の花る　尼 壽松
湖上
魚見ゆる隈ともあすつり舟かな　羅城

桐一葉ちるやひとはもの〻秋　岱青
妻の夜をこゑや落る桐の山やどき　岳輅
冬の日のひとり旅るにハ餅の何　北雲

笠ハ長途の雨ニほころひ
紙子ハとまりとまりの嵐ニもめ
たるなりふりの中とて ゆか
尾張の出ニ古く拾ひ傳へる
人のなつかしさを 蕉翁百年の
手向言讃すみ今千亮津ニかくし置ぬ
今や時を得る人くしの結縁ニもと
思ひしてこゝニあらし侍りぬ

寛政八丙辰二月

岱青
大魚
士峯 撰

松硯序

まつ津能硯といふを誰かあや
是ハ武隈の松の葉まみそめのく
人能松の名りも風をも旅り今
路能ものつら能ぬ古きをふ
るをなきものとあしとなり
友人岱青か古き切くときて

をしきすゝきすゝしたる色
菊もをとおきまで鵆のこゑ
むかしから羅漢法師にハ
たゝみをまくへりぬる

朱樹叟
山朗

松の硯

夏草の日数ハ二百十日かれ　傳聞 蕉雨
淋しき月ふきつゝて花ぼける　、左詰
瑞牛浮雲ハ秋の空　、壷伯
雨ふ刷てきつかなかり夜の月　スハ 若人
かりそめの夢ふわらぬもとき　、玄光
峠をも峠の露とかりけり　、砺雲
一日の庵ハ深しほとゝぎす　、素染
すゝしさやひとり秋に入　上田 雲帯
有明に水鶏のうしろありけり　、如毛

みしか夜やさて出されぬる庵の外　羅城
かさ数ハ雨香の拾女か囲むしろ　仝

八巣石上飲

月の出ハきのふに郷かり郭公　羅城
家の香りに咲のこし数器　蕉雨
屋小さ花村雨の名残して事　壷伯
人の襟をとりしくに君る　城
独小かぶる萩も御堂を結ひて　雨
三ッ子もされて兎追ふ弓　伯

簑笠ハおやかましに咲ちきれ　城
人里を経雅の志しつ浪　雨
今の盲小せ緒の津のあら宮　伯
妙法蓮くやる馬の鞍壺　伯
唐の戸を急の紋に押かくし　雨
菊の御宴も首の二とせ　城
盆の月露の撥子かもひ　伯
八島へ船を出す　むしのある　雨
大釜の蓋を焦して　をうしろ　城
吮の子脇り　礫　淀をりんぐ　伯
子梅に古き　みな鉢を結ひ舟　雨

迷くよけくをれす蔦　伯
因人は琵琶もちてま露　城
障子のみ八雲の甲斐ヶ根　雨
積負しすゞに魚居の仮枝　伯
一もをねつて拳蕪をうる　城
猫ふさうる鼻のけん中くは目藁で　雨
と待ちろく猫る越女二人　伯
極すゝき西椛の小梯を掘埋め　城
膳ゟ手を結ぶ風のうしろさ　雨
何も角も月に秋とすめるの淀　伯
皈ま持く芝蔓のをむしろ　城

冬彩を見て八月に九ふひ　雨
豆腐くされと雨や梅ちらん　伯
ちらりぬらと音を浅く秋の末　城
烟をうつしつ釣り先手らか　雨
桂の家は古き地蔵を書うけ　伯
煙ちそつる　池の　水音　城
藪花の奥にすゝき茎ひろつ　雨
松のすゝをつゝるゝけるふ　伯

あり明の月は出てうつしの山　羅城

さわく風の吹く葦ある　浪　素檗

明わたる空の雲雀と啼あげて　城

人住ぬ宿の　浪　のうけ　檗

笛の音杖よしきかする藤葉　城

一畦にひく秋の草　く　檗

十の指七ツの事の要にあくて　城

紫繋て継し枕　指　来る　檗

さまで香あてども知と恨みひ　城

寄やしの涙よく流いてものいふ　檗

閨の夢指く久しき　梅鹿　城

流くれはあつまし　祭り　檗

すてゝ置し二人が姿画よりん　城

苔の露をためる戸の口　檗

明ぬ花の声も鶴の憶く　城

何ちらちらく向ては糸つむ　檗

杉もつくの待ひつきなる　鍬五文　城

小さゝやその日かえやむしろく　檗

天明癸卯の秋山裂巖燃く
人民其の焦熱に死るもの数を

しつかなる帯そのわたりを帯ぶ身に　羅城
いさこ黒く地黄なりあかき　雲帯
蛩蟀しくるゝ肝に汗し　城
ありや入日てりつく浅ぢふ　帯
雲のくづれける夜の蒼さ　城
難題て芦毛の馬の踊り出て　帯
さつと溢るゝ蒔の折紙　城
裳階の雛の宗胡ひらき　帯
雲に棹さす沖の釣船　城
葡萄嚙き鳥のわかれつりて　帯
文に侍らん旅の夜　城(?)

男のよろこび兜の伽羅の薫ひ　城
菫のなさけ雪の日なり酒　帯
白牡丹門も桂の名をしき　城
難波のさまりゆくと吹風　帯
若きいく世の尼の墨衣　城
花の添生も形の末かくれ　帯
浮絹のゆるくさく朧月　城
漁り火の影ゆらしてたゆる　帯
十石の社頭久しく備りて　如毛
都に夜るかへる黄牛　城
まとあるたとへも慈字似とのふ　帯

岩根をたゝみく　室の匂ひ綴　毛

雨くもりつき風呂桶の芸　城

ちぎりきる襟の黒染ののれんかね　常

乙の子ハ代脇坊と来ずめり　毛

二本づゝくりと詰る鶉養の焼　城

角の茶つよ蔭藁を打さく　常

張りこしいのち斗中立の膝　毛

夢みふ山の峰のむりをさがして　城

机のうゑ筆の飯をあまり　常

蔭くるき扇に露の涙ちりて　毛

ひ柴りに小袖おろす蓑解　城

羽縄の大扇子もをかけ帰　常

石の菩薩の鵜飼ひくる　毛

三尺にたらぬ葵に露のもり　城

隣の男ぶもゆひよ来たる　常

錦に芸打ちそへ蔦山刀　毛

いくつも糸にくゝるふきの芽　城

雲弟ら山荘を立出るより
十里ばかり光ちるのんく
を納ひくるり此地ハ帰路を
訪しく戸隠芭蕉井ヶ国を

漸く出る峰古茶の華を
窮しみりして八月定の
表都姻の出家済ま私を
経へ年すくま十月晋善光寺
まいりつ入ぬ
如来菩薩釋然
南無阿弥陀佛と鉦ちるに灯明燭　羅城
十般の宮殿宝家明ち方　柳荘
枇杷の葉さいはてす鵜の声の奉て　五什
ぬき捨てゝ置雲の古机　左皐
水の色風の涼さよかりけり　莫二

峯の上に冥の白雲　希言
山吹を手折くゑ寺　女達　総左
酒のうらくは猪させる条　地　文兆
ひとかひしと砂の上にて魚を釣て　凡化
をうしき方へ向くく溜池の家　杜亭
疱瘡邪を藪のあれさへ送りやり　荘
筆の端書の七夕の月　城
桐一葉秋の名はなし　こゝろこ　皐
胡波の間結へしむとふ鉦か　什
わすりろり水を籬は出ひ近て　言
西の峰そとる旅る橋の濡　二

出代ハ花に隠れぬそのかまへハ
冬かけかけて鶴啼あり
江におもふ人の淺に聞えけれ
茶汲く臼の休むもの声
獅子舞の手ふりとものを思ひ柚
世をうらむるは眉ハ落さし
芦垣の一重も花の香の花にし
若葉ほかりしら雲の都に吹
ほつくと急を知ねる灯して
帯ききらぬ文をまつ手まする
川舟をとさす沙時にわしけし

兆 左 孚 化 城 荘 什 皐 二 言 左

村のかゝすりそろく沙にも 立
半ききぬ笛の音を高の岬の月
霧ふかき濤うきぬの上 帯
りわきを橋坦の屋の庭を
栖の岩し井に蓋を 下ゝる
中くみ七合の子のかしこ さよ
日の入かゝの浪ゝ高ゝ 幢
棹さすハ花を数ぬる舟なる
眠りさめたる 神 時 春風

兆 化 孚 荘 城 什 言 左 兆

寛政丁巳冬十月　羅城記

跋

ははききのふせやをたつねてろの
はらをめぐり、つたゝつらてゝらむい
のちのゝけはしをわたり、みすすゝ
るをきろ、すはじのふじ、さをとめ
ゝあないに、たごとかはすてさらしな
をさまよひ、よゝしみつてらのひゝ

りに、こころをすこしうしして
ひとひとゝつゝりいたせるくゝを、
ここにしるすきさらたのさらうは、
またたくつるのくさくさにあら
あむとあり

第19472号 受入 36.3.
枇七 三 上 四十一